



「私という形」を離れ真理の縁起がみえるの巻 by地涌の声

阿修羅王のように神も修羅界に堕ちたという話が物語るように、人は誰しも、自分の正しさに固執すると、心に争いや苦しみを生んでしまいます。それは僧侶といえども、「私」という形に執着し、視野が狭くなり盲目になると、法の真理が見えなくなることがあるものです。

人には能力の違いがありますが、源が濁れば末も濁ったまま継承され続ける危険があります。それを目覚めさせてくれるのは、必ずしも職としての「聖」ではなく、「俗人」であっても構わないのです。プライドの中に失ってしまったものもあるものですが、私たちは互いに学び合える平等な存在であることも「法華経の精神」といえます。

～漫画補足とお願い～

1コマ目の僧侶の言葉には、意図的に「上から目線＝権威の表現」を加えています。この2000年近く続いてきた対立は、ごく普通に釈尊が説いた真理の法眼で見れば一目瞭然のことです。しかし「権威と学という蓋」によって、かえって盲目となっていました。常に自ら懺悔（自省）を行っていれば気づくことでもあります。「一般人」という表現は、私の主観ですが、『妙法蓮華経』に説かれる「変化の人」一どのような人でも仏様のお使いとして目の前に現れる可能性のある存在一を指しています。

今回は意図的に、1・3コマ目のピンクのサリーを着た女性キャラクターを、4コマ目では大人の姿で描写しました。1・3コマ目は相手と同じ目線、同じ土台に立つ表現を加えたものです。

2コマ目には「波」の比喻を用いました。すべては「縁起」という一つの海に現れた、その時々の波の形に過ぎない——という意味です。これは仏教の「空（くう）」や「無我」の概念も示しています。

3コマ目では、「私」という殻が砕ける表現を用いています。内側から光が溢れ出す姿を演出し、内なる光が外側の殻を自ら打ち破る構成としました。殻は外からの攻撃的な圧力ではなく、自らの内なる力でしか打破できないことの象徴です。そこには「我執（がしゅう）」一自分に執着する状態一があります。

それは立場であったり、自尊心であったりします。あるとき、とある僧侶の人の配信スペースを聞いていましたら、隣でお庫裡さんが「僧侶の人の喋り方じゃないね」と一言。私はそれぞれの価値観があるので良い悪いは決めつけられませんが、立ち居振る舞いにも

気をつけなければならないと、自戒を学ばせていただきました。私も配信では気をつけているつもりですが、SNSで他人の反省する姿を見て「俺が上だ」と慢心する人もいます。そうした人の性質や姿を、象徴的に表現することもあります。どうかご理解のほどよろしくお願ひ申し上げます。

お釈迦様は、楽と苦、富と貧、喜怒哀楽など、さまざまな極致を体験され、それを通り道としてやがてブツダとなられました。綺麗な事、楽しいことばかりでは、この世の本質を表現するのに不足があります。「縁起」とは、単なる因果論ではなく、相互依存の関係性を指します。厳密には「因縁生起（いんえんしょうき）」または「諸法は縁起なり」という教えがあります。いずれも深い教えですので、4コマ漫画にどのように表現するかは試行錯誤を続けています。細かい意味付けは省いていますが、それぞれの心に何を感じるかという「縁起」が生じることを願っています。

お釈迦様の時代から続く仏教寓話やジャータカ（本生譚）では、極端な人物像を使って教えをわかりやすく伝える例が数多くあります。どうかご理解いただきますようお願いいたします。

どうか一つの作品や映画、漫画を楽しむような気持ちでご覧いただければ幸いです。細かい描写については、私なりの洞察をできる限り加えて表現していきたいと思ひます。

再拝